言語系科目・フランス語＜言語情報処理論（フランス語）＞

全学共通科目と専門科目との「有機的な連携」の試み：「リベラル・エデュケイション」の実践

全学共通カリキュラム運営センターフランス語教育研究室主任／
異文化コミュニケーション学部教授　石川 文也

0. はじめに

「言語情報処理論（フランス語）」は、立教大学のすべての学部学生を対象とする教育カリキュラム「全学共通科目」[1] の中の「言語系科目」の「自由科目」のひとつとして、池袋キャンパスと新座キャンパスで毎年、春学期あるいは秋学期のいずれかに 1 コマずつ開講されている科目である[2]。同科目は同時に、2016 年度から導入された「グローバル教養副専攻」プログラムの修了要件単位となっている選択科目のひとつでもある。具体的には、当該副専攻を構成する 3 つのコースの中の「Arts ＆ Science Course」における「第 3 系列（言語力科目）」の「言語自由科目」として、また「Language ＆ Culture Course」における「テーマ 5：French Language ＆ Culture」の「第 2 系列（基幹科目）」を構成する科目群のひとつ、フランス語圏の理解を深めるための「言語自由科目（関連科目）」として位置づけられている[3]。

「全学共通科目」および「グローバル教養副専攻」プログラムの科目である当該科目は、それぞれの理念あるいは精神・趣旨をどのように実現できるか（あるいは、すべきか）。さらにはそれらを統合し、そして凌駕して、立教大学のリベラル・アーツ教育の科目としてどのように提供されうるか（あるいは、されるべきか）。本稿は、これらの問いに対する、当該科目を担当した筆者の実践にもとづいた考察の断片である[4]。

---

1 「全学共通科目」は、「総合系科目」と「言語系科目」の 2 つの科目群で構成されている（立教大学（n.d.）：「カリキュラムとしての『全カリ（全学共通科目）』」（<http://www.rikkyo.ac.jp/education/system/general/overview/>、閲覧日：2019 年 1 月 7 日））。現行制度の「全学共通科目」は、2015 年度までの学部 1 年次入学者および 2017 年度までの学部 3 年次入学者を対象とする旧課程においては、「全学共通カリキュラム」と呼ばれていた。なお、現行制度は、「全カリ 3rd ステージ」と呼ばれている（立教大学全学共通カリキュラム運営センター、2015）。

2 同科目は、2012 年度までのカリキュラムでは、「フランス語情報処理」と呼ばれ、「全学共通カリキュラム」の中の「言語教育科目（自由科目）」として位置づけられていた。

3 「グローバル教養副専攻」の 3 つ目のコースは、2018 年度に開設された「Discipline Course」である。このコースの中では、「言語情報処理論（フランス語）」は、コース修了要件となりうる科目としては位置づけられていない。

1. リベラル・アーツ科目としての「言語情報処理論（フランス語）」に求められるもの

1.1.「全学共通科目」に期待された「リベラル・エデュケイション」の精神

筆者は以前、アメリカ型「リベラル・エデュケイション」の精神について、この呼称の一部として使用されている「リベラル」ということばに関する概念的側面からの考察（松浦、2004）、およびこの教育の枠組み内で運用されているカリキュラムの制度的特徴を明らかにした研究（松浦、1999, 2004；松井、2004）[5] を援用して、次のように述べた（石川、2010）。

> 「リベラル・エデュケイション」の精神とは、「学習内容よりも学習プロセスに重点を置きながら、具体的な事象についてその根源あるいは深層に向かうような思考・洞察・問題提起ができる力を育成し、このような根源あるいは深層に向かう考察によって得られた結果をほかの事象にも普遍化できる能力をつけさせ、その一連の活動から『メタ』の学習成果を獲得させることを目指す」ということができる。（*ibid.*：pp. 85-86）[6]

さらに、筆者は、立教大学でリベラル・アーツ教育として現在展開されている「全学共通科目」の前身である「全学共通カリキュラム」（以下、「全カリ」とする）と、アメリカ型「リベラル・エデュケイション」との類似点と相違点を、立教大学が全カリ教育を導入する至った経緯をまとめた公式の記録（立教大学全カリの記録編集委員会、2001）に依拠して明らかにし、全カリ教育のあるべき姿を次のように述べた。

---

4 筆者は、現行制度下で、2016 年度から 2018 年度にかけて当該科目を毎年度担当している。また、旧制度下の 2009 年には、当該科目の前身である「フランス語情報処理」を担当した。筆者は、本稿で述べる、これらの科目のあり方に関わる考え方を、「フランス語情報処理」を担当した 2009 年度から今日まで、授業の中で実践してきている。

5 松浦（1999）によれば、アメリカ型「リベラル・エデュケイション」とは、「広さ（一般教育）と深さ（専門教育）および自主性（自由選択）に配慮したカリキュラム、および教室外の学生の経験を総合した教育概念」である（*ibid.*：p. 42）。

6 この「『メタ』の学習成果」とは、具体的な事象の根源あるいは深層を指向する思考・洞察・問題提起ができると同時に、その思考・洞察・問題提起をする自己そのものについても思考・洞察・問題提起ができ、そのようにして自己を相対化できる能力（筆者はそれを、「批判的知」と呼んでいる）のことを指す。筆者は、自身が担当する言語科目以外のすべての科目（所属学部の 1 年生向けの輪講科目や専門科目、専門演習、そして「言語情報処理論（フランス語）」をはじめとする「全学共通科目」、および大学院の科目）の第 1 回目の授業において、考えられうる 21 世紀的な新たなエピステモロジー（認識論的枠組み）を示したうえで、その枠組みの中で、この「批判的知」が伝統的な学問分野とどのようにかかわるかを履修者に説明している。

> 全カリはそれ自体で完結した教育カリキュラムではなく、全カリが大学における「リベラル・エデュケイション」として機能するためには、既存学部の教育との「連携」（全カリの記録編集委員会、*op. cit.*：p. 76 *sq.*）が前提となり、またこの「連携」がなければ本来的な意味での「リベラル・エデュケイション」としては成立しないことを意味する。換言すれば、全カリの教育と学部の教育は相補完的であり、それら二つが揃ってはじめて「リベラル・エデュケイション」が成立するということができる。つまりは、立教大学の全カリでおこなわれている「リベラル・アーツ教育」は、それ自体で独自のリベラル教育を展開し、同時に既存学部の教育と密接な関係を持ちながらそれらを支え、逆に、そして同時にそれらによって支えられることによって本来的な意味での「リベラル・アーツ教育」を展開するという、二重構造によって支えられた教育であるということができよう。（石川、*op. cit.*：p. 87）[7]。

現行の「全学共通科目」は、当時の全カリ教育の理念を受け継ぎ、「広い視野と判断力に基づく総合的な知性を養うとともに、外国語によるコミュニケーション能力と異文化対応能力を育てること」[8] を新たな目的として設定されたカリキュラムであるとされている。

この新しいカリキュラムの中で「言語系科目」に位置づけられ、さらに「グローバル教養副専攻」の中では「Arts & Science Course」の「第 3 系列（言語力科目）」の「言語自由科目」として、あるいは「Language & Culture Course」の「Theme 5 French Language & Culture」の「第 2 系列（基幹科目）」の「言語自由科目（関連科目）」として位置づけられる科目「言語情報処理論（フランス語）」において、「リベラル・エデュケイション」の精神、特に前述の「メタ・レヴェルの思考能力（「批判的知」）の涵養」と「学部の専門教育との有機的な連携」はどのように実現できるか（あるいは、すべきか）。

この問いについて考察する前に、「言語情報処理論（フランス語）」を提供科目として組み込んでいるカリキュラムあるいはプログラムの教育目標に関わる記述から読み取れ

---

7 筆者がこのときにおこなった考察の後半部分（石川、2010：p. 88 *sq.*）は、当時、筆者が、そのような展望に立って、「リベラル・エデュケイション」の具体的な実現の場のひとつと考えて担当していた科目―当時の全カリ教育の「総合科目」として位置づけられていた科目―である「フランス語圏の文化」の授業の実践報告であった。当該科目は、現行の「全学共通科目」の中では、「総合系科目」のひとつの科目群「多彩な学び」のサブカテゴリ「人間の探求」に分類されている。また、「グローバル教養副専攻」プログラムの中では、「Arts & Science Course」の「第 2 系列」科目に、「Language & Culture Course」の「Type B」の「Theme 5 French Language & Culture」の「第 2 系列（基幹科目）」科目として分類されている。

8 立教大学（n. d.）：「カリキュラムとしての『全カリ（全学共通科目）』」（<http://www.rikkyo.ac.jp/education/system/general/overview/>、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.

る、当該科目に対して求められた教育内容、さらに、その教育内容と「リベラル・エデュケイション」の精神との関係について述べることにする。

1.2.「言語情報処理論（フランス語）」に求められる教育と「リベラル・エデュケイション」

カリキュラムとしての「全学共通科目」は、その枠組みの中で提供される科目を、「総合系科目」と「言語系科目」に大別し[9]、「言語情報処理論（フランス語）」が位置づく後者の目標を次のように定めている。

> 言語系科目では、主に少人数クラスでの聞く・話す・読む・書くという基本的技能の訓練を通じて当該言語による専門的または日常的なコミュニケーションを可能にし、異文化対応能力を獲得する[10・11]。

これは、この系列に属する科目は主として言語運用にかかわるスキルの向上を目指し、その言語あるいはそれと結びついた文化と接した場合に必要となるコミュニケーション能力を獲得することを目標とすると述べているものと理解される。

それに対して、「学部の専門性に加え、テーマをもって横断的につながる知識と外国語を使う力を身につける」[12] あるいは「所属する学部学科や専修の専門性に加えて、複数の分野にわたる知識を一つのテーマに沿って修得し、多面的に物事を捉えて持続的に考え続ける能力を養成する」[13] ことを目指すプログラムである「グローバル教養副専攻」の方では、「言語情報処理論（フランス語）」が履修可能科目のひとつとして組み込まれた「Arts & Science Course」の「第３系列（言語力科目）」の「言語自由科目」の目標は、「全学共通科目の言語系科目、外国語で行われる科目などでの学習を通じ、

---

9 注１参照。

10 立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度） － 2016 年度以降学部１年次入学者、2018 年度以降の学部３年次編入学者、全ての大学院学生」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018_1.html>、p. 全－38、閲覧日：2019 年１月７日）.

11 立教大学では、「履修要項」は学部別に編集されており、「全学共通科目について」と題された項目が共通の情報として各学部の「履修要項」に挿入されている。それに対して、「グローバル教養副専攻」プログラムは、各学部の専門分野との関係において、それに外置されたものと位置づけられているため、「履修要項」の中では各学部の中の１項目として掲載されている。

12 例えば、次を参照。立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度） － 2016 年度以降学部１年次入学者、2018 年度以降の学部３年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 18、閲覧日：2019 年１月７日）.

13 立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度） － 2016 年度以降学部１年次入学者、2018 年度以降の学部３年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 73、閲覧日：2019 年１月７日）.

現地で異文化との接触を経験するために外国語での受信力および発信力を磨く」[14] ものとされ、また、同様に当該科目を履修可能科目として取り上げている「Language & Culture Course」の「第 2 系列（基幹科目）」の目標は、「［特に］言語 B を中心としたテーマでは、「多彩な学び」のうち、当該言語圏に関係した講義科目の履修を通じて、その文化圏や多文化共生への理解を深める」[15-16] ことであるとされている。このことは、「言語情報処理論（フランス語）」に対して、この科目が単に学生の言語（フランス語）運用能力向上を目指すことを目的とするのではなく、それと同時に、言語と結びついた文化圏（フランス語文化圏）とそれにかかわる問題に関わる知識を涵養させることも目的とする可能性を内在するものであることが期待されていることを示している。

すでに述べたように、「専攻科目（あるいは専門科目）（major, concentration, or specialization）」をその内部に持たない、あるいは外置（学部）に頼る全カリ（石川、*op. cit.*）の枠組みをそのまま引き継いだカリキュラムとしての「全学共通科目」は、制度的に、「リベラル・エデュケイション」の精神をそれ自体で実現するものではない。アメリカ型のリベラル・アーツ・カレッジに照らし合わせて考えるのであれば、カリキュラムとしての「全学共通科目」は、むしろカリキュラムとしてのアメリカ型「リベラル・エデュケイション」の構成要素のひとつである「一般教育（あるいはコア科目）」に相当するものであるというのが適切である。また、アメリカ型のリベラル・アーツ・カレッジでおこなわれている「副専攻（minor）」制度は、一般的に、履修科目を、「一般教育（あるいはコア科目）」と「専攻科目（あるいは専門科目）」という枠を捨象して集約的に設定しているが、立教大学の「グローバル教養副専攻」プログラムをこのアメリカ型のリベラル・アーツ・カレッジの「副専攻」と符合させて考えるとしたら、それは、なによりもまず、立教大学のカリキュラムとしての「全学共通科目」を、そのように、アメリカ型のリベラル・アーツ・カレッジの「一般教育（あるいはコア科目）」に相当するものとみなした場合に限られる[17]。

そのように、立教大学のカリキュラムとしての「全学共通科目」は、それ自体におい

14 立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度）－ 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 74、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.

15 立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度）－ 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 74、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.

16「多彩な学び」は、「学びの精神」、「スポーツ実習」とともに「全学共通科目」の「総合系科目」を構成する科目群のひとつである。この「多彩な学び」は、「1．人間の探求」、「2．社会への視点」、「3．芸術・文化への招待」、「4．心身への着目」、「5．自然の理解」、「6．知識の現場」のカテゴリーに分かれる。

ても、そして「グローバル教養副専攻」プログラムとの関係においても、完結した「リベラル・エデュケイション」であるとは言えない。それが、本来的な「リベラル・エデュケイション」（の一部）して成立するためには、すでに述べたように、「学部教育との有機的な連携」を実現し、その中で「メタ・レヴェルの思考力（「批判的知」）の涵養」を目指すことが必要となる。「言語情報処理論（フランス語）」は、そのような必要性を帯びた「全学共通科目」として開講されており、その限りにおいて、当該科目に対しても、授業の中でこのことを実現していくことが求められていると考えるのが妥当である。

筆者は、そのような考え方にもとづいて、2016 年以降毎年度、この「言語情報処理論（フランス語）」の授業を、また旧制度下の 2009 年には、当該科目の前身である「フランス語情報処理」を担当している。これらの授業の中で、特に 2018 年度春学期に池袋キャンパスでおこなった授業の実際を、次に紹介する。

2. 学部の専門科目との「有機的な連携」を目指す、「批判的知」の実践の場としての「言語情報処理論（フランス語）」

筆者は、2018 年度春学期に池袋キャンパスで担当した「言語情報処理論（フランス語）」の授業を、導入部、第 1 部、第 2 部の 3 部に分けて進めた。導入部（第 1 回目の授業）においては、21 世紀的な新たなエピステモロジー（認識論的枠組み）とはいかなるものか、そして「批判的知」は伝統的な学問分野とどのようにかかわるか、さらに当該科目はその枠組みの中でどのように位置づくかを示し[18]、そのあとの第 1 部（第 2・3 回目の授業）を言語運用能力・スキルの向上を目指す場とし、第 2 部（第 4 ～ 14 回目の授業）を「批判的知」の実践の場とそれぞれ位置づけて、授業内で「学部教育との有機的な連携」の実現を試みた[19]。以下に、その内容を、第 1 部と第 2 部に分けて述べる。

2.1. 言語・スキル科目としての側面の実践

「言語情報処理論（フランス語）」は、カリキュラムとしての「全学共通科目」の中で

17 ただし、その呼称の対応関係については一考を要する。アメリカ型のリベラル・アーツ・カレッジの「副専攻（minor）」制度は、「専攻科目（あるいは専門科目）」に対して、それに追随し、あるいはそれを補完する包括的な制度であるが、立教大学の「グローバル教養副専攻」は、「所属する学部学科や専修の専門性に加えて、複数の分野にわたる知識を一つのテーマに沿って修得し、多面的に物事を捉えて持続的に考え続ける能力を養成するプログラムである。その目標は『専門性に立ち世界に通用する教養人の育成』である」とあるように、限定的である（cf. 立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度）－ 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 73、閲覧日：2019 年 1 月 7 日））。

18 注 6 参照。

19 授業の具体的なスケジュールについては、文末に掲載した「Syllabus」を参照。

「言語系科目」のひとつとして開講されている。当該科目は、その意味においては、言語運用にかかわる「スキル科目」ということができる（上記の「1.2.」参照）。しかも、履修者に要求されるレヴェルは、初級ではなく、「履修要項」に、「『フランス語基礎 1』および『フランス語基礎 2』の単位取得済が望ましい」[20] とあるように、中級レヴェル以上が想定されている[21]。このことは、当該科目の履修者は、フランス語の初級文法の知識を最低限度習得していることが期待され、さらに、そのうえで、「聞く・話す・読む・書くという基本的技能の訓練を通じて当該言語による専門的または日常的なコミュニケーションを可能にし、異文化対応能力を獲得する」[22] ことが求められていることを意味する。実際に、例えば、筆者が担当した 2018 年度春学期の授業では、登録者 11 名の全員がフランス語既習生であった[23]。

当該科目が、「フランス語基礎 1」あるいは「フランス語基礎 2」と異なり、さらにはカリキュラムとしての「全学共通科目」の中で、その他の「言語系科目」の「自由科目」として開講されているフランス語の科目とも異なるのは、単に目標言語の言語運用能力の更なる向上を目指しているのではなく、その名称が示すように、主に、フランス語に関わる「情報処理」に関わる能力、すわなち「数字・文字・物理量などによって表された情報について、コンピューターにより計算・分類・照合その他の処理を行う」（新村、2018）ためのスキルの向上を目指している点にある。これを敷衍（ふえん）して言えば、「フランス語で書かれた、あるいはフランスに関わる情報を、フランス語あるいはその他の言語を使って情報端末などの機器を駆使して収集し、それを、同じく情報端末などの機器を使って分類・整理・選択し、さらに学術的作法に従って加工あるいは使用して、最終的には学術的な目的に寄与する形にまとめる」ことが、当該科目の特徴であるということになる。

フランス語で書かれた、あるいはフランスに関わる情報を掲載した書籍や論文は、例えば大学図書館の OPAC（On Line Public Access）を使って検索・収集することができる。同様の情報は、インターネットで検索エンジンを使っても見つけることができ

20 立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度） － 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 全－64、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.

21「履修要項」の「配当年次」は 1 年生からとなっているが、「レベル（科目群）」には「中級」と明記されている（立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度） － 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 全－64、閲覧日：2019 年 1 月 7 日））。

22 注 10 参照。

23 学部と学年の内訳は、文学部仏文専修 2 年生 7 名、同 3 年生 2 名、異文化コミュニケーション学部 2 年生 1 名、経済学部 3 年生 1 名であった。

る[24]。OPACであれ、検索エンジンであれ、そのような手段を使って情報を検索する場合、検索の手掛かりとなるキーワードの入力は、必ずしもフランス語の正書法に則る必要はない。フランス語には、例えば、「à」、「ç」、「é」、「ë」、「î」、「ù」のようにアクセント記号がついた特殊文字が存在するが、一般的に、これらの文字からアクセントを取り除いた文字一つまり、この場合、「a」、「c」、「e」、「e」、「i」、「u」一を入力しても、その単語のほかの部分の綴りが正しく入力されていれば、本来はアクセント付きの文字であることをシステムの方が自動的に認識し、求めている情報に到達できることが多い。しかしながら、そのようにして入手した情報を、学術的作法に従って加工あるいは使用して、最終的に学術的な目的に寄与する形にまとめる作業をフランス語でおこなう場合には、正書法に則った文字を入力しなければならない。Microsoft の Word などの文書作成ソフトを使ったフランス語の特殊文字の入力の方法は、「フランス語基礎 1」あるいは「フランス語基礎 2」など純粋な言語科目の授業では扱っていないため、「言語情報処理論（フランス語）」履修者にとっては、この種の文字の入力方法は、習得すべき最初の事項となる。

実際の授業でも、第 1 部の 2 回の授業で、そのような言語運用能力・スキルの習得を目的として、フランス語の特殊文字の入力の方法について説明した。そして説明終了後には、第 1 回目の課題として、指定した項目（氏名・所属学部・専門分野、所属するサークルとそこでの活動、趣味、立教大学について考えること、大学卒業後の展望）を含む自己紹介文を Word を使ってフランス語で作成させ、メールの添付ファイルで提出させた。提出されたファイルは、教員（筆者）の方で読み、同じく Word のコメントボックス機能を使ってコメントを付し、それぞれの履修者にメールの添付ファイルで返却した。

2.2. 「批判的知」の実践の試み

第 4 回目の授業から始まる第 2 部では、情報端末などの機器を使って分類・整理・選択した情報を、第 1 部で体得した言語運用能力・スキルを使いながら学術的作法に則って加工あるいは使用し、最終的に学術的な目的に寄与する形にまとめるという作業を実際におこない、その作業を通じて、当該科目の主旨として定めた、学部の専門科目との「有機的な連携」を目指した「批判的知」の実践を試みた。

高等教育機関としての大学における教育・学習の「出口」としておこなうべきこと、特に立教大学の場合、現行カリキュラムであれば「完成期」と呼ばれている「学部の多

24 ただし、筆者は、「ウィキペディア　フリー百科事典」のような、執筆者が匿名であり、その学術性・専門性についても疑義を挟み込む余地がある情報サイトについては、その情報を引用すべきではなく、またサイトそのものも参考文献表や参考にしたホーム・ページの一覧に載せるべきではないと学生に伝えている。

様性を活かす演習科目等を選択し、4 年間の学びのまとめ」[25] という意味を持つ最終段階ですべきことは、多くの学部で選択科目あるいは事実上の必修科目として課されている「卒業論文（制作）」―具体的な事象（対象）の深層について思考・洞察・問題提起をし、その思考・洞察・問題提起をする自己をも相対化するメタ・レヴェルの思考の実現の場―の作成である。筆者は、そのような意味を持つ「卒業論文（制作）」[26] に繋がる作業を、そしてその作成の練習となる作業を授業内でおこなうことこそが、当該科目と学部教育との「有機的な連携」を最大限に実現する方法であると考え、第 2 部の 11 回の授業では、フランス語圏に関わる具体的な事象を取り上げ、それを分析・考察対象として扱った「卒業論文（制作）」を作成するとした場合に必要となる、論文の「研究計画書」の作成を達成すべき目標と定めた[27]。

実際の授業では、フランス語圏に関わる具体的な事象として、インターネット上で入手が可能な、3 分ほどの長さの短編ビデオクリップ『Belge Side Story』を取り上げた。これは、その名称が示すように、ベルギーに関わるものである。ベルギーは、ゲルマン語系のフラマン語が使用される北部のフランドル地方と、フランス語（およびフランス語系のワロン語）が使用される南部のワロニア地方、そしてこれら 2 言語が併用される首都ブリュッセルから成り立ち、フランドル地方とワロニア地方とはこれまで言語的に対立してきたという歴史を持つ。当該作品は、その対立を、『ウエストサイド物語』（原題：『West Side Story』（Arthur Laurents 脚本、Leonard Bernstein 音楽のミュージカル、1957 年初演。のちに映画化され、1961 年に公開）をパロディ化して表現し

25 例えば、次を参照。立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度）－ 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 18、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.

26 例えば、2016 年度入学生から適用されている現行カリキュラムにおいては、文学部では、「卒業論文（制作）・卒業論文（制作）指導演習」が選択科目として提供されている。また、異文化コミュニケーション学部では「卒業研究」あるいは「卒業課題」が、社会学部では「卒業論文」または「卒業研究」が、選択科目（事実上の選択必修科目）として設置されている。理学部物理学科では、「卒業研究 1・2」が、化学科および生命理学科では「卒業研究」が必修科目となっている。

27 筆者は、主に、自らの学生時代からの論文執筆経験、および前任校（横浜市立大学）のゼミや立教大学における「専門演習」あるいは「卒業研究指導演習」における学生の論文の指導経験をもとに、論文の「研究計画書」にはどのような要素が必要であり、またどのような構成を取るべきかを、「学術的活動の技法」と名付けた Word 形式の電子ファイルや、あるいは「『批判的知』の実践」と題した PowerPoint にまとめ、授業で配布あるいは提示している。また、学術的文章として成立するために必要な要素と取るべき形式をメタのコメントによって掲載した「研究計画書」のフォームを Word のファイルで用意しており、それを筆者の授業・「専門演習」・「卒業研究指導演習」を履修した学生全員に配布している。当該科目の履修者に「研究計画書」の作成を求めた際も、同ファイルをメールの添付ファイルで配信した。また、異文化コミュニケーション学部の「卒業論文（研究）」についても、メタのコメント（指示コメント）を記した電子ファイル書式を準備し、執筆の早い段階で学生に配布し、それに従って作成するように指示している。

た作品である。登場人物の会話とナレーション、そしてテロップにはフランス語が使われている。

この作品が語る内容、特にそのパロディ性について学術的思考を巡らせるためには、次の 3 つのことがまず要求される。①作品内で使用されているフランス語を聞き取り、あるいは読み取って理解すること、②パロディの素材となった『ウエストサイド物語』の内容と、そこで語られている 1950 年代のニュー・ヨークの社会状況を知ること、③ベルギーという国の特徴、特にフランドル地方とワロニア地方との言語的対立の経緯と現状を知ること、である。これらを知ることは、この作品について学術的思考を巡らせる際に必要となる「研究計画書」の執筆の前段階となる準備作業となる。

履修者にとって、第 2 部の 11 回の授業のみを使って、これらの作業をすべてひとりでおこない、さらに論文の「研究計画書」を執筆することは時間的にも困難である。そこで、筆者は、これら 3 つの作業を重複しないように割り当てたグループを 3 つ作り、履修者を、それぞれの希望を聞いたうえで、これら 3 つのグループに割り振って、グループ・ワークで準備作業をおこなわせることにした。実際には、グループごとに作業を進める前に、まずは、パロディの素材となった『ウエストサイド物語』について知っておく必要があった―履修生全員からもそのような要望が出された―ため、履修者全員でこの映画を観ることにし（第 5・6 回目授業）、その後、グループごとの作業を進めることにした（第 7 ～ 10 回目授業）。そして第 11 回目の授業で、その作業の成果をグループごとに報告させた。

グループ分けの際に、すでに、それぞれのグループに対して代表者をひとり決めさせておいた。代表者の役割は、メンバーと話し合って作業の分担を決めること、そして報告の前までに、それぞれの担当者に作業の成果を Word のファイルで提出させ、それをまとめて最終的に報告用のレジュメを作成すること、さらにそれを報告の前日正午までに、教員（筆者）が事前に作成しておいた履修者と教員（筆者）を含むメーリングリストを使って履修者全員に配信することである。

報告に臨むにあたって、履修者全員に対して、それぞれのグループが配信したレジュメを事前に印刷し、内容を読み、質問を準備して、報告がおこなわれる授業当日に持参するようにあらかじめ求めておいた。報告では、各グループの持ち時間は 30 分とし、その前半約 20 分を実質的な報告にあて、後半約 10 分を質疑応答と教員からのコメントの時間とした。教員からは、報告の内容の補足をおこなったほか、レジュメの作成の仕方、特に、参考にした文献やホーム・ページ内の情報の引用・言及方法、そして文献表やホーム・ページの一覧表の作成の仕方についてコメントした。

報告後は、その内容を履修者全員で共有し、それをもとにして、第 2 回目の課題、すなわちビデオクリップ『Belge Side Story』を分析対象とした卒業論文を書くとした場合に考えられる独自の「研究計画書」を作成し、提出することを求めた。「研究計画書」の作成にあたっては、あらかじめ配信しておいた Word 形式による指定フォーム―タイトル、サブ・タイトル、もくじ、概要（のちに論文中の「はじめに」になるもの）、

参考文献表、参考にしたホーム・ページの一覧、付録の項目を備えたもの―[28] を使って作成するようにした。履修者の中には、所属する学部で卒業論文を書く予定でない者もいたため、彼（女）らのことにも配慮し、論文の「研究計画書」の執筆趣旨に準じ、それに代わる課題（当該ビデオクリップを、パロディの視点から学術的作法に従って分析・論述させるもの。字数は 4,000 字程度）も選ぶことができるようにした。2018 年春学期の当該科目の授業では、履修登録者 11 名のうち、代替課題を選択した履修者は 3 人のみで、ほかの 9 名は論文の「研究計画書」を作成する課題を選択し、提出した。

グループ・ワークでの作業、論文の「研究計画書」あるいは代替課題の作業は、基本的に授業中におこなわせた。教員（筆者）は、その間に適宜、履修者の進捗状況を見て廻り、また報告の準備の仕方あるいは課題の作成の仕方について質問が出された場合はそれに個別に答え、アドヴァイスをおこなった。基本的には、少人数グループへの指導、そして個人指導を徹底するように努めた[29]。

提出された課題は、第 1 回課題のときと同様、教員（筆者）の方で読み、Word のコメントボックス機能を使ってコメントを付し、それぞれの履修者に対してメールの添付ファイルで返却した。返却は、最終回の授業から 1 週間以内におこなった。

以上が、「言語情報処理論（フランス語）」の授業の実際についての報告である。

3. おわりに

立教大学のリベラル・アーツ教育と、アメリカ型「リベラル・エデュケイション」との、制度的あるいは理念的側面における根本的な相違点は、次の点に集約されると考えられる。それは、立教大学においてリベラル・アーツ教育を標榜するカリキュラムとしての「全学共通科目」（あるいは、旧制度の「全カリ」）は、それ自体では「リベラル・エデュケイション」の精神を実現することができず、その実現を達成するためには、教育における「メタ・レヴェルの能力（「批判的知」）の涵養」を立教大学で開設しているすべての科目において目指すこと、そしてそれを通じて「全学共通科目」と学部の専門科目との「有機的な連携」を実現することが必要となるという点である。換言すれば、立教大学で「リベラル・エデュケイション」を実現させるのであれば、マクロのレヴェルにおいては、「全学共通カリキュラム」と既存 10 学部の各カリキュラムのすべてが、

28 注 27 参照。

29 アメリカのリベラル・アーツ・カレッジでおこなわれている「リベラル・エデュケイション」でも、ひとクラスあたり 12 人あるいは 13 人から 30 人程度の少人数クラスで、質の高い授業がおこなわれている（松井、2004）。学生との恒常的な対話を実現するためには、クラスの人数は多くない方がいいが、筆者は、例えば「フランス語圏の文化」のような大人数を想定する講義形式の授業であっても、学生との対話が構築できるように授業のやり方を工夫した（石川、*op. cit.*）。学生との対話は、教育の現場を下から支える礎石である。

それらの間にしばしば見え隠れする恣意的な力学的衝突・不均衡[30] を止揚し、政治的にも学問的にも中立的な立場から、「全学共通カリキュラム」と既存 10 学部の各カリキュラムとの「有機的な連携」の実現について改めて考えることが必要であり、そしてミクロのレヴェルにおいては、たとえそのような制度的変更を実現する可能性が低かったとしても、「全学共通科目」のできる限り多くの授業において、考える自己をも相対化する「メタ・レヴェルの思考能力（「批判的知」）の涵養」を目指して、その科目の方から学部の専門科目に対して、「有機的な連携」のための触手を伸ばしていくことが必要である。

課題としての「レポート」は、授業や書籍などで得た知見をまとめ、第三者（教員）に報告するという点においては学術的に一定の意味を持つものではあるが、高等教育の最終的な目的は、そこ、つまり、「Re-port」（「再び－運ぶ」）にとどまってはならない。必要なのは、「リフレクション」すること、つまり、「個別の現象についてそこで起こっていることを分析的な視点から批判的に捉え（直し）、その深層について問題が提起でき、それについて展開する考察を［相対化し、］普遍化できる」（石川、*op. cit.*：p. 91）[31] 能力を身につけることである。

「グローバル教養副専攻」プログラムの目的が、「所属する学部学科や専修の専門性に加えて、複数の分野にわたる知識を一つのテーマに沿って修得し、多面的に物事を捉えて持続的に考え続ける能力を養成する［ことにあり、］その目標は『専門性に立ち世界に通用する教養人の育成』である」[32] のであれば、「グローバル教養副専攻」の科目として位置づけられた科目は、学部の専門教育との関係においてのみならず、この「グローバル教養副専攻」との関係においても、一元的かつ主観的に物事を捉える傾向に陥りやすい自己を相対化し、そのような自己に対して常に思考・洞察・問題提起をする「メタ・レヴェルの思考能力（「批判的知」）の涵養」の重要性を今後、授業の中で、あるいはカリキュラム改革の中で、さらに追求していくべきである。

いしかわ　ふみや

---

30 立教大学でおこなわれてきたリベラル・アーツ教育の改革に関わる主な関心事は、「全学共通科目」（あるいは、旧制度の「全カリ」）の「総合系科目」（あるいは、旧「全カリ」の「総合科目」）を、学部における専門の教育の水準を保ったまま、それとどのように結びつけるかという点にあった（立教大学全学共通カリキュラム運営センター、*op. cit.*）。

31 「リフレクション」の語源的意味は、「Re-flection」（「再び－曲げる」）である。筆者は、思考対象に当たって曲がった「思考のベクトルの矢」を再び自分の方に向けなおし、今度は自分自身を思考対象とするという意味で使っている。

32 例えば、次を参照。立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度）－ 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、p. 73、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.

参考文献・参考資料

石川文也（2010）：「『リベラル・アーツ教育』としての『批判的知』の実践：『広さ』と『深さ』をもつ『メタ文化』教育の試み」、『大学教育研究フォーラム』、no. 15、pp. 82-94.
新村出（2018）：『広辞苑』（第７版）、東京、岩波書店 .
松井範惇（2004）：『リベラル教育とアメリカの大学』、岡山、西日本法規出版 .
松浦良充（1999）：「リベラル・エデュケイションと『一般教育』―アメリカ大学・高等教育史の事例から―」、『教育学研究』vol. 66、no. 4、pp. 39-48.
松浦良充（2004）：「『リベラル・アーツ』をめぐる理解と誤解―比較大学・高等教育史の視点から―」、『教育文化』no. 13、pp. 16-40.
立教大学全学共通カリキュラム運営センター（2015）：『ニュースレター』、no. 38.
立教大学全カリの記録編集委員会（2001）：『立教大学＜全カリ＞のすべて―リベラル・アーツの再構築―』、東京、東信堂 .

参考にしたホーム・ページの一覧

立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度） － 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018_1.html>、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.
立教大学（2018）：「立教大学履修要項（2018 年度） － 2016 年度以降学部 1 年次入学者、2018 年度以降の学部 3 年次編入学者、全ての大学院学生：異文化コミュニケーション学部／異文化コミュニケーション研究科」（<http://ry.rikkyo.ac.jp/yoko/2018/2018_ibunka.pdf>、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.
立教大学（n. d.）：「カリキュラムとしての『全カリ（全学共通科目）』」（<http://www.rikkyo.ac.jp/education/system/general/overview/>、閲覧日：2019 年 1 月 7 日）.

Syllabus

言語情報処理論（フランス語）

授業の目標　Course Objectives

コンピュータを使用して仏文文書を作成し、さらにインターネットを利用してフランス語圏に関わる情報を検索できる技能を身につける。

授業の内容　Course Contents

マイクロソフト社の文書作成アプリケーション・ソフトを使って仏文特殊文字の入力を練習する。またインターネットを使ってフランス語圏のウェブ・サイトの情報へアクセスし、必要な情報を入手する訓練をおこなう。フランス語圏で配信されているヴィディオ・クリップを実習の題材として取り上げ、履修者を割り振ったいくつかのグループごとにその分析作業を進め、その成果を報告する。

授業計画　Course Schedule

1. イントロダクション：カリキュラム上の位置付け・講義内容の説明
2. 仏文文書の作成とインターネットによる情報検索の基礎（1）
3. 仏文文書の作成とインターネットによる情報検索の基礎（2）
4. 実習の題材の紹介、グループ分け
5. 映画「ウエストサイド物語」
6. 映画「ウエストサイド物語」
7. グループごとの作業（1）
8. グループごとの作業（2）
9. グループごとの作業（3）
10. グループごとの作業（4）
11. グループごとの中間報告
12. 課題作成作業（1）
13. 課題作成作業（2）
14. 課題提出：まとめ